

後藤靜香選集

第八卷

善本社

刊行のことば

一八八四年大分県に生れた著者は、東京高等師範で数学を学び、女子教育に従事すること十三年、使命を感じて退職上京、全国を対象とする社会教育に身を投じ、これに挺身すること五十年、一九六九年八十五歳で東京に没した。

生涯に創刊した月刊誌二一種、その多くは一人で執筆し、その最盛期には講読者百万人をこえ、輪転機で印刷した。著書七〇余冊。彼は単なる講演者著述家ではなく、常に大衆教育家、文化運動の指導者であった。勤労教育の主張と実践をはじめとし、救ライ、愛盲、老人福祉の先駆者、ローマ字、エスペラント、現代かなづかい等のすぐれた宣伝普及家でもあった。

今その生涯の全著作から、代表的なものをえらび、ここに「後藤静香選集」全十巻を刊行、後世への文化遺産とする。

後藤静香選集 第八巻

遺産・幻の教室

一九七八年八月十日 初版

著者 後藤 静香
発行者 山本三四男

企画編集 後藤静香選集刊行会
代表 中山 隆祐

〒160 東京都新宿区高田馬場一―三―二
振替 〇―一二二九〇

発行所 株式会社 善本社

〒101 東京都千代田区神田神保町一―六〇
電話 東京 二九四―五三一七
振替 東京 九―一一九五五七
印刷 花山印刷

落丁、乱丁はおとりかえいたします

《目次》

遺 産

評 価	三
胸にひびく	五
感 化	七
父の思い出	九
花と人	二
お伽の国	一四
ふるさと	六
働くしつけ	三
紫の煙	六
体 罰	六

朝	三
河 童	三
漢方医	七
田舎道	四
不器用	四
わが道	四
芽生え	五
父の父	七
角石さま	六
お小遣い	六
特待生	七
正 宗	七
親バカ	七
桑原先生	七

月も星も		五	呼び名		一四
鮮血		六	男性		一六
冷たい孝行		六	箸		一八
母の晩年		六	雷獸		二〇
最初の印象		六	生駒先生		二三
台帳紛失		六	嘉納先生		二五
お婆さん		六	銀杏		二三
マラソン		六	移り香		二三
香いすみれ		六	骨相		二六
大師新道		六	常識		二九
詩のころ		七	地主		三三
金モール		九	小作祝い		三三
暴徒		一〇	行き過ぎ		三七
日本刀		一三	天覧		三九

3 目 次

ほまれ	一四	師父	一六
田母沢	一五	楚人冠	一七
いも屋	一四	信ずる性格	一五
掃除隊	一四	信の限界	一七
ハエを買う	一五	弱 虫	一六
国民学校	一五	めいわく	一八
親 方	一四	ふしぎな世界	一八
銀 行	一五	種あかし	一四
宿 屋	一六	神は父なり	一六
牛めし	一六	エスペラント	一五
ふとん	一五	私の流儀	一六
古 着	一五	ライの問題	一八
花ぐるま	一五	点訳の問題	二〇
焚くほどは	一七	アイヌ民族	二〇

高砂族	二〇四
白系ロシア人	二〇五
ドイツの子供	二〇七
すっぱん	二〇八
初ものの食い	二〇九
情熱の子	三二
少年期	三三
青年期	三五
壮年期	三八
五十代	三〇
老年期	三二
一人	三五
教壇の人	三七
教授法	三〇

幻の教室（論語）

未練	三三
欠陥	三四
弁解	三七
権威の碑	三九
あの日	四四
大家庭	四八
学んで時にこれを習う	三五
朋あり遠方より来る	三五
日に三省す	三九
治国三原則	三六
三十にして立つ	三六
惰性の力	三七

精進努力の一生……………	二七五	君は君たれ……………	三〇〇
引出す教育……………	二八〇	君子と小人……………	三三五
民を信服させるには……………	二八七	政治三つの眼目……………	三九九
富貴天にあり……………	二九二	民を教える……………	三五四
恒心の友……………	二九七	六十の気焰……………	三六九
溜め息……………	三〇三	「仁」の三原則……………	三七四
理想を語る……………	三〇七	君子は和して同ぜず……………	三七九
天命というもの……………	三一四	仕えやすい人、にくい人……………	三八三
鄙事に多能なり……………	三一九	仁者と勇者……………	三八五
後世畏るべし……………	三二四	人に忠実とは……………	三八八
顔回の死……………	三三九	晩年のさびしさ……………	三九一
ほどほどがよい……………	三四五	子路の無理解……………	三九三
四海みな兄弟……………	三四〇	おとなを氣どる……………	三九六
政治の本領……………	三四四	君子もまた窮す……………	三九九

一もってこれを買く……………	四〇三	君子に九思あり……………	四三
徳を知るもの……………	四〇五	ずるい一面……………	四三五
ともに語るべき人……………	四〇六	前言取り消し……………	四三六
君子……………	四二	恭・寛・信・敏・恵……………	四四〇
一言にしてつくせば……………	四二四	もう話すまい……………	四四三
盲人を遇する道……………	四二七	君子も人を悪む……………	四四六
益友と損友……………	四三〇	狂人の歌……………	四四九
益者三楽・損者三楽……………	四三三	四つのいましめ……………	四五二
陥りやすい過ち……………	四三六	君子に三変あり……………	四五五
君子の畏れ……………	四三九	女子と小人……………	四五八

遺

産

まえがき

この本は私の自叙伝の一部とも見られるが、自叙伝を書くつもりでまとめたものでなく年代順にもしてないし、仕事中心にも記してない。

この本の中には、私という字がやたらに出る。私が私のことを書いたのだからやむをえない。しかしこの私は、静香という一個の私でなく、かげに多ぜいの支持者があり、その人たちの力なしには、なにもできなかった場合が多い。そういう「かげの私」の名も記してない。書くとなれば大変な数にもなり、A氏をあげてB氏のもれることもあらうと思っただからである。

この本は相当のページになって、読まれる方にはお気の毒であるが、必ずしも順序だてて読むに及ばず、気の向いたとき、どこからでも自由によんで頂きたい。私の肉体は地上から去っても、この本は永くのこり、多くの人の良い友となれと祈る。

人間はいくら生きても、もうこれでいいというときはなく、いつまでもいつまでも生きたいものらしい。この本もその願いの現われである。

昭和三十三年初夏

庭に紫のクレマチスが咲いた朝

後 藤 静 香

評 価

次々と親しい人が死んでゆく。わかりきった話だが、死んでしまえばそれっきり、なんの音さたもない。写真に向いていくら話しかけても返事さえしない。三十幾年身近にいた妻も七十をこえた私をのこしていつてしまった。

私にもあまり遠くない未来に順番がくる。そう思うと、なんとなく心があせる。

私の生れた田舎には、親ゆずりの財産がいくらあった。私は次男であったが、長男が幼いときに死んだので、父の死とともに、財産の全部が私のものになった。しかし、家は焼け、田畑は農地解放でみんな小作人の所有ときまったので、あとには十カ所ばかりの山林だけが残った。私も私の子供も東京に住んでいる。田舎に山林をもっている、十分の管理もできず、いつそのこと、木材や薪炭に不自由な村人に提供したらと思ひ、私のたましいに最初にあかりをつけてくれた小学校に寄付してしまった。親ゆずりでない財産というものは何にもない。あるものとは無形の財産——私の言葉、私の仕事だけである。

3 評 価
こんな考えから、幾年前であったか『権威』の決定版を出し、これが私の遺産だと発表した。しかしあの本だけでは、よくわからなかったり、誤解したりすることも多いのではないかと気づかれ、毎月の『新建設』に、遺産百編として、随筆風なものを連載したのが、これも予定の百編に達した。

今度は、それを種本にして、あたらしく書き改め、一冊の書物としたのである。この遺産は私の血と関係なく、心のつながりをもつ人たちが、自由に受けとっていくもので、千人に、万人に、幾十万人に及ぶ贈り物となるかもしれない。有形の財産とちがひ、いくら多ぜいの人にわけても、めいめいの分け前がへりもせず、またこの遺産の値うちは、いくらとも評価ができない。ある人は、なあんだ、こんなものといつて屑屋にわたし、ある人は、千万金にもまさるものとして、一生の仕合せを生み出すもとでとすかもしれない。

胸にひびく

通りすがりに、講演会の立て看板が目につき、何というあてもなく、ふらふらと会場に入る。講師は、わざとらしい気取りもなく、心に思うことを淡々とした調子で話しているが、どうした心の動きか、その言葉が一つ一つこたえてくる。何だか自分だけに、話しかけられているような気持になる。こういう経験をした人は、たくさんあろう。

床屋で、自分の順番を待つひまに、備えつけの珍しくもない雑誌を、読むともなく読んでいると、ふと目についた短い言葉が、い、な、ず、ま、のようにひらめいて、腹の底までしみとおる。三年たっても五年たっても、忘れるどころか、ますます強い威力を示して、自分を引きずってゆくこともある。

こんな経験を持った方もあろう。

よく考えてみると、自分を一定の方向にみちびいてゆく何かが、自分のうちにひそんでいる。その何かが原動力となって、自分の行動を左右していることに気がつく。それはいくつかの言葉にふくまれた思想である。自分では気もつかず、いつのまにか、自分と同化し、信念になっているのである。それだから、この言葉にまちがいがあると、自分も脱線し、ひとにも迷惑をかけることになる。

胸にこたえる言葉が、何々の本にあると指定することはできない。何の本にもある、誰の話の中にもある。毎日の新聞にも、求めている心には、ささやきかけるものがある。

名士の講演を何べん聞いても、幾千ページの書物を読んでも、眼で読む、耳で聞いただけでは、その場かぎりのものになる。自分のものとして、一生のたからとなるのは、心で読み、たましいで聞いて、胸底深くしみ通ったものである。

感 化

非行少年を集めて世話しているところから、時々、いく人かの脱走者を出して、世間をさわがすことがある。つかまると、おきまりのように、設備がわるい、食いものがわるい、係り員が不親切だと訴える。経費も少なく、人手も足りない現状では、彼らの訴えるような事実もないとはいえまい。しかし、こうした場合、収容所の人たちに対し、教化の無力をなじることは、どんなものであろうか。

自分の子供を見てもわかる。すこし物ごころがついてくると、もう親の自由にはならず、強いておさえつけても、暴力に負けて、表向き服従しているだけのこと、心から納得したものではない。

お嫁にいった次女たち五人家族が、いま私といっしょに住んでいる。孫が三人あって、長女は小学校の二年、下二人の女兒は双生児である。同じ両親をもち、同じ母から、わずか三十分ちがいで生れたというだけで、同じ家に育ち、何もかも公平な扱いをうけ、同じ服装で、同じ幼稚園に通っていても、二人の性格は、はっきりとちがっている。顔かたちは、見わけのつかないほど似ていても、性格にはいろいろなちがいが見える。成長するにつれて、そのちがいが、ますます大きくなるのであろう。

私はこの事実を見ても、感化力などというものの、微々たることに気がつく。

人格の高い人のそばにいて、その感化をうけ、私の今日あるは先生のおかげだ、と感謝するような人もあるが、こっちでいい気になり、自分の感化によるものと思ったら、それこそ、おめでたいかぎりだ

ある。

わたしなど、若いころから、人の顔さえ見れば、お説教じみたことを言い、物を書けば、何か教訓めいたことばかりならべたててきたが、わたしの力で、一人でも感化したとは思えない。世間には「後藤の弟子だ」「後藤先生のおかげで」といって、私に過分の厚意を示してくれる人がたくさんある。しかし、私から見ると、そういう人たちは、みんな素質のいい人で、わたしの言葉から、いのちあるものを発見し、自分の努力で身につけたまでのこと、わたしの感化など思いもよらぬ話である。

他人はもとより、私は自分の子供でも、感化しうとは思えない。三男三女、それぞれの性格をもち、それぞれの道を歩んではいるが、私が自分の意志で感化したと思う点はない。教育者や父兄の言葉、また行動が、若い人たちに、いろいろな影響を与えていることはたしかである。環境の力の恐ろしいことは、今さら語るまでもない。しかし、自分たちの感化で、何かできると思ったら、思い上がりというものであろう。人間は——わたしは、それほどに微力であることを告白する。

七十幾年生きながら、一人でも感化しえなかったということは、まことにお恥かしい次第であるが、本当だから仕方がない。